



人生の三角波シリーズ

# 人間到る処 青山あり

第6回 (最終回)

## 日英のはざままで

※三角波：時化た海で方向の違う二つ以上の波が重なってできる三角形の波で、船の舵が取れなくなる危険な状態を言う  
※人間到る処青山あり：死して骨を埋める場所は至るところにある。故郷を出て活躍すべきだとの意。

フォト・ジャーナリストの加藤節雄さんを以前から存じ上げていたが、人生経験をうかがう機会には恵まれずにいた。昨年、加藤さんが日本の文化を英国に紹介されてきた功績で外務大臣賞を受賞され、その際に披露された経歴をぜひもっと詳しくお聞かせいただきたいということでこの対談が実現した。

(センターピープル代表取締役 飯塚忠治)



飯塚 当初は5回のシリーズでお願いした対談でしたが、お話を伺っているうちに、もう少しお聞きしたいということになりました。第6回目の対談をご快諾いただきましてありがとうございます。日英の文化の違いを語っていただいたら、多分、本が一冊分の内容になると思いますので、本日は日ごろお感じになっておられることをお話いただけますか。

加藤 この10年間は特にボランティアの活動が多くなり、これらを通して感じることをご紹介したいと思います。コーンウォールのセント・アイブスにあるバーナード・リーチの工房の修復プロジェクトでは、日本側の代表を務めたのですが、英国流の物事の進め方と日本流のやり方の違いには苦労しました。大きな違いは、日本人はプロジェクトの予定表を最後まで作り、きちんとオーガナイズしないと安心できない。一方、英国人はかなりフレキシブルで優柔不断、動いてもらうにはかなりのプッシュが必要だったりして、日本人は言われればすぐに取り掛かるのとは対照的でした。

飯塚 それでもプロジェクトは完成するのですね。加藤さんは日本人として当然なことだという思いで、色々感じてこられたのだと思いますが、英国人に日本人論を話してもらったら、日本人のやり方は不可解だとか、別の考えがあるのでしょうか。

加藤 昔の詩人キップリングの有名な言葉に「東は東、西は西、両者が一緒になることはない」というのがありますが、この言葉を文字通り読むと、しよせん文化が異なるから無理なんだと思ひ違いしようになります。でも彼はその後の行で、「しかし、両者が対等の立場で向かい合えば東も西もなくなる」と続けています。実際はどうかというと、日常生活ではキップリングの言うようにはなかなか……というのが実感です。

飯塚 私もこの言葉の最初の部分は聞いて知っていましたが、彼が締めくくった「対等に」という言葉が生きてくると、分かり合えることの深さが増すような気がします。ところでボランティアの活動は多岐にわたっておられるようですね。

加藤 日本クラブ理事、日英交流促進委員会委員、在英日本人劇団の理事、日本文化紹介チャリティーの理事、ジャパン・ソサエティー賞選考委員、SOAS / JETRO共催のビジネス日本語コンテストの質問者、写真クラブ主催などなど——このような活動を通して感じるのは、国と国の関係は深まっているが、まだまだ日本人の英国人理解が進んでいないように思います。日本人の駐在員の間で「英人」という言葉をよく耳にします。「英人だからしょうがない」「英人には分からない」といったふうに、たいていの場合、英国人をダメな人たちと認めたような表現を使うのを耳にすると悲しくなります。

飯塚 そうですね。加藤さんは人生の半分以上を英国で生活されてきているわけですから、日本に片足があり、もう一方の足が英国にあるというお立場だと思います。このようなコメントはどちらのサイドから耳にしても、当事者として胸に痛みが走ることは想像できます。自分の家族が悪いことを言われたら気分が良くなるのと似ているのでしょうか。さて、加藤さんの今後のご予定は？

加藤 フリーランスに定年はありませんから、今後も社会に貢献できる心身の健康がある限り、現在関わっている多くのプロ

鉄道のリールは前に伸びているが、目の前が崖だったら？  
ときには崖のような困難を飛び越えつつ、文字通りシベリア横断鉄道を使って英国にやって来たフォト・ジャーナリストの加藤節雄さん。  
「フリーランスの仕事は決して『フリー』な状況ではないですよ」——  
1970年代からフリーのジャーナリストとして英国で活躍する加藤さんの半生の紆余曲折を振り返る。全6回シリーズ。

### 加藤 節雄さん プロフィール

- 1941年……………5月5日端午の節句に東京に生まれる
- 1966年……………早稲田大学新聞学科卒業
- 1966～69年………キーストン通信社東京支局でフォト・ジャーナリストとして勤務
- 1970～90年………フリーランス・ジャーナリストとして英国、欧州のニュース・トピックスを日本のメディアに提供
- 1991～2002年………在英邦人向け情報紙「日英タイムス」の編集長として活躍
- 現在……………日本クラブ会報「びっくべん」編集長、日本クラブ理事、著書多数



プロジェクトを続けていきたいと思います。英国在住の日本人をみてみると、日本人同士の夫婦や独身者は、老後になりますと日本に帰る人が多いですね。国際結婚した人はそうもいかないで、この国



加藤さん(写真右)と奥様のジルさん(同左)

に残る人が多いように思います。私は自分の人生の半分以上を英国で過ごしてきていますから、時々、自分は英国人なのか日本人なのか迷うこともあつたりします。それほど英国の生活が自然に感じられるということなのでしょう。先ほど飯塚さんが片足を日本に、そしてもう一方の足を英国にと表現しましたが、両国にしっかりと足を下ろした日本人として、私はこれからもずっとワイフのジルと英国で生活を続けていくつもりです。

飯塚 加藤さんご自分の選択で、シベリア鉄道ではるばる日本から英国にやって来られた。それは1970年のことで46年の時が過ぎました。たくさんの大波をかぶりながら、今のいぶし銀の魅力を感じさせてくださる加藤さんが目の前にいらっしゃるのだと思いました。6回にわたりました対談のために貴重なお時間をちょうだいいたしまして、本当にありがとうございました。

最近泳ぎを始めた私ですが、25メートルのプールの向こう側まで泳ぎ切るのに、多くの人が泳いでいるせいで生まれた小さな三角波が顔に当たり、実に泳ぎにくい。この三角波のない静かなときの泳ぎの楽なこと(そんなことは稀にしかないのですか)! 世間と一緒にだと最近感じたものです。でも泳ぎ切った後の爽快感、これもいいものです。(飯塚)

本コラムの過去記事は、下記アドレスでご参照いただけます

[www.centrepople.com/japanese/article](http://www.centrepople.com/japanese/article)

Presented by  
**centre people**  
Recruitment Consultants

情報を発信し続けるセンターピープルは、人材紹介、派遣のエキスパートです。  
誠意をもって心をこめたサービスを企業様、ご登録者の皆様に提供することを常に目指しております。